

---

# 蠅になる

早見徒雪

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蠅になる

### 【Nコード】

N4379P

### 【作者名】

早見徒雪

### 【あらすじ】

かつて引きこもりだった男が目を覚ました時、彼は一匹の蠅となっていた。男はその運命を呪いながらも、次第に蠅としての人生を受け入れていく。そしてある時彼が目にしたのは、痴話喧嘩の末、殺された女と殺した男。蠅になった男は女の死体を前に、ふとある行為を思いつくのだが……。

一雄は蠅になっていた。

最初に彼が気づいたのは、己の影であった。大きな目に短い触覚、伸びた口吻、六本の脚と二枚の翅がはえた胴体に丸く太い腹部。彼はそのシルエットが蠅のそれであることは理解できたが、それが自分の姿であることをなかなか認めることができなかった。彼の気持ちに重く沈んだ。なぜ自分がこのような姿になってしまったのか。神の怒りか仏の慈悲か。ずっと彼はひたすら自分の運命を呪うばかりであった。

輪廻転生について、彼もいくばくかの知識をもっていた。しかし何故「蠅」なのか、何故「自分」なのかという理由については、明確な答えを見いだすことは出来なかった。前世の罪に対する大いなる罰ということなのだろうか。しかしあれこれ思い巡らしてみても、一雄は自分がこれほどまでの罰を受けるに値するほど、非道い人間であったとはとうてい思えないでいた。

そんな時、突如として嵐のような風が吹いて、一雄は驚き慌ててその場を飛び立った。だが飛び立った方がいいが、目にするモノたちの大きさや距離感などの感覚がおかしくなっていて、さらに翅を使って飛翔することも彼には始めての経験であり、なんだかわけもわからずに、とりあえずとまる場所を移すことが精一杯であった。すると今度は、そこに巨大な水滴が次々と降り注いできた。自分の体よりも大きく勢いも尋常ではない固まりの攻撃を受け、彼は右往左往しながら逃げ回るばかりであった。

一雄がはじめにとまっていた場所は、公園に咲いているタンポポの葉の上であった。しかも彼は上下さかさまに、葉の裏側にとまっていたのである。また、その後彼はかなりの距離を飛んだと思っていたが、実際はただ隣の葉へ移っただけに過ぎなかった。彼が感じた突風の原因は、その花のすぐ側まで幼女が駆け寄ってきたからで

あり、巨大な水滴は、その娘が手にした玩具の如雨露から滴り落ちたものであった。いずれにせよ、すべては彼の理解の範疇をはるかに超えた体験でもあった。

幼女の気まぐれな水撒きが終わり、気持ちが落ち着いてくるようになる、一雄はまわりの風景もはつきりと目に入るようになってきた。町中にどこにでもあるような小さな公園。その中の形ばかりのさらに小さな花壇。その周辺を徘徊する小さな子供達とおしゃべりに夢中な母親達。強い日差しがさんと照りつけてはいたが、さわやかな夏の日常の風景がそこにはあった。

少しずつ飛ぶ感覚やコツも身に着きはじめていた。変に意識して「翅を動かす」という動作をしなくとも、ただ「翔ぶ」ということ、「翔んでいる自分」の姿を頭に思うだけでよかったのだ。そのことがわかれば、翔び回ることも徐々に面白くなってきた。それは一雄が幼い頃、はじめて自転車に乗れたときの感動と相似していた。

一雄はふと思いついて、さきほど自分に水攻撃を仕掛けた幼女へと近づいてみた。さらにその顔の辺りを目掛けて、集中的に飛び回り始めた。彼女は目の前に突如飛び込んできた黒い小さな物体に驚き、短く小さな手でそれをつかみとろうとした。だがそのあまりにも緩慢な動きでは触れることすらかなわず、さらに調子に乗った一雄が、ぶんぶんと大きく不快な翅音を奏でながら、その目や耳のあたりを何度何度も旋回しながら飛び続けていると、彼女にはもはやなす術はなかった。幼女はその場にぺたんと腰を落とすと、甲高い声で泣き喚きだした。慌てた母親が駆けつけるよりも早く、少しは溜飲を下げた一雄は高らかにその場を飛翔していくのであった。

飛びまわっているうちに、一雄はどこからか食欲をそえられるにおいを感じた。彼がそのにおいの方向に向かって進んでいくと、とあるアパートの共同ゴミ捨て場が目に入った。そこはコンクリートでまわりをただ固めただけの粗末な集積所であり、一応不燃・可燃等の仕分けされているものの、捨てられたゴミのほとんどにはその分別が徹底されていない様子であった。おそらく収集不可のため、

長らくその場に放置されたままのそれらゴミは、カラスや野良犬などが酷く荒らしていったらしく、ぼろぼろに破られた袋からは生ゴミの類があちこち顔をのぞかせていた。

一雄がとまったのは、そこで無造作に投げ出されていた、食べ残しの散乱しているコンビニ弁当の容器の中であつた。保存料と着色料にまみれた怪しい食材ですらも、この夏の炎天下ではさすがに変色し、すえたにおいをかもし出していた。だがそれはあくまで人間の感覚で言うならば、である。蠅となつた一雄にとっては、そのにおいは甘美なものとなっていた。彼は全身でそのにおいを嗜み、口吻を伸ばして残飯を丹念に味わつた。

蠅はその脚の先端に味覚と臭覚を備えているという。つまりとまった瞬間にそれが食べられる物かという判断と、その味すらも感ずることができなのだ。だが一雄はそんな蠅の構造を理解しているわけでもなく、その脚から流れてくる味覚・臭覚のすばらしき感覚にただ酔いしれるだけであつた。もしも彼に理知的な感覚が残っているのであれば、一匹の虫と化した自分が、腐つた生ゴミを好んで食していることに抵抗や苦悩が生じていたはずだが、あいにくヒトであつた昔から、彼はあまり聡明な人物ではなく、それゆえ悩むこともなかつた。

十二分に食欲を満たした一雄は、再び大きく翔びたつた。先程よりも飛ぶ力に弾みがついたかのようにだつた。彼の眼前には先程のゴミを放置したと思われる、古ぼけた木造のアパートがそびえたっている。

彼はゆっくりとその二階あたりを円を描きながら飛び回つた。築二・三十年は過ぎているだろう。もはや入居者も少ないらしく、ほとんどの部屋の窓や雨戸は閉められたままになっていた。そんな中で一つだけ、大きく窓が開かれた部屋があつた。薄汚れたカーテンが風になびいている。一雄はまた気まぐれに、勢いをつけてその部屋の中へと入つていった。

一雄はまずそのカーテンにとまると、それから天井へと張り付い

て、上体を反らすようにして部屋全体を大きく見渡した。六畳一間の部屋の中は薄暗く、床の上は足の踏み場もないほど散らかっていた。次に備え付けの小さなキッチンの方へ飛んでみると、汚れた食器やカップラーメンの器などが高く積み上げられており、一応それらは水にはつけられてはいたが、何日も前からそのままになっていた。さらにそこにはすでに何匹かの先客たちが飛び回っていた。一雄はその時まだ満腹であったため、彼らの食事場に割り込むことは控えた。

その部屋はかつて一雄が住んでいた部屋を思い浮かべた。あそこも暗く狭くて重苦しいところであった。ただ大きく違っているのはそこが郊外住宅の一室であったことである。さらに彼の両親も健在であって、同じ家で暮らしていたが、彼は二階の自分の部屋に閉じこもったままで、めったにそこから出てこようとはしなかった。また家人が逆にその聖域を犯すことをとことん嫌った。直接会話することもなく、食事も部屋の入り口に置かせていたほどである。確かにあの部屋も散らかってはいたが、さすがにこれほどではなかった。たよな、と一雄は心の中でせせら笑っていた。

そんな部屋にも二人ほどヒトの住人がいることが認識できた。まず一人は三十代ぐらいの男で、部屋の片隅で頭を抱えて座わりこんでいた。扇風機もすぐ傍に置いてあったが、何故か電源は入っておらず、ランニング一丁の上半身は汗まみれであった。近くを飛んでみると、何故か小刻みに震えているのがわかる。風邪でもひいているのか。一雄は男に嫌悪感を催して、すぐさまその場から離れるのであった。

もう一人は二十代後半ぐらいの女で、窓側のベッドの上にほぼ大の字に横たわっていた。その上、彼女は全裸であった。彼女が身に着けているものは、何故か顔にかけられた派手なスポーツタオルのみで、体系のわりに小ぶりの胸とたるんだ腹をしていた。そして下腹部には覆い隠すものが何もなく、そのままの状態で醜く放り出されていた。

一雄はその女に、別の奇妙な違和感を感じた。この暑さであり、また二階とはいえ道路のすぐ脇の場所である。いろいろとくたびれた豚であろうと、すべてを投げ出しさらけ出して不貞寝するのにはいろいろと問題があるはずである。さらにさきほどからピクリとも動かず、寝息も呼吸も感じられないことから、一雄の頭の中で、ある疑念が確信へと変化しようとしていた。

一雄は飛ぶ方向を変え、彼女の肩口あたりへとまった。そしてその瞬間すべてを理解した。

女は死んでいたのである。

死後どれほど経過したのであろうか。すでに彼女の肌には弾力すらなくなっており、驚くほど白く、かつ冷たかった。大粒の汗で湿っている男に対して、彼女は逆に、もはやカラカラに砂漠の如く乾ききっていた。顔上のタオルは、その死に顔を隠すためにかけられたと見るべきだろう。

確かに彼女の顔はすべて覆われていたが、顎から下のあたりは一部しか隠されてはいなかった。一雄が隙間から覗いてみると、女の首には太く赤いアザが残されており、おそらく彼女は絞殺されたのだということをも物語っていた。

犯人は……同部屋のあの男に違いない。彼が頭を抱え、震えている理由も飲み込める。詳しい事情はわからないが、自堕落な男女の痴情のもつれ。ギャンギャンわめく馬鹿な女を、暴力男が首を絞めて永遠に黙らせたというだけにすぎない。世間的にはありふれた話だった。

一雄はふと、死んだ女の乳房にとまってみたくなった。女性の裸を見てかつてのような性欲が生じてしまったとか、もう少し肌に触れてみたいとか、そういったヒトだったころの記憶や感覚によるものではない。あくまでほんの気まぐれ、肉体的よりも精神的なちょっとした閃きによるものであった。例えば小さな子供が、横断

歩道の白線の部分だけを選んで渡ったりする時のような、大きな意味がありそうで、本人以外にはまったくの意味のない遊戯的な行為の一つに過ぎなかった。すでに一個のモノと化している醜いヒトのムネ。その小さな膨らみに存在する黒い小さな塊。ただそこにとまってみたら面白いだろう、と考えただけに過ぎなかった。

そして彼はすぐにそれを実行したのだった。

部屋の隅で頭を抱えていた男は、次第に落ち着きを取り戻していた。冷静になってくるにしたがって、韜晦や贖罪の念は消えていつて、代わりにいかにしてこの場を逃れるか、すべてをなかつたことにできないものか、といった自己弁護・自己保身の考えが頭の中を占め始めた。自分は悪くない、女は死ぬべくして死んだのであり、まだまだ自分はやり直せる。そんなことばかりを考えていた。

だが、死体はどうするか。この季節にいつまでもこの部屋に隠しては置けない。この安普請のアパートでは、すぐに死臭が蔓延してしまうだろう。わずかに残っている住人や近所の連中が、騒ぎ出すのは目に見えている。

では捨てるか。何処に？どうやって？ ドラマだと山中に穴を掘って埋めたり、古井戸に投げ込んだりしたのを見たことがあるが、地方とはいえ車で簡単にいけるような距離に、そんな都合のいい場所が存在しているかなど、彼はまったく知らなかった。彼は地理には疎く、何より車の免許を持っていなかった。

ならバラバラにして捨ててしまうか。それならばたとえ見つかったとしても、頭とか胴体とか、肝心な部分が見つからない限り身元が割れるまで時間がかかるだろう。さらに例えば右腕は北海道で左足は沖縄に捨てるなどして、まったく関係のない土地に埋めてしまえば、ますます捜査は難航するに違いない。

もし死体の大部分が見つかったとしても、そうすんなりとは捕まるまい。確かに男とあの女が付き合っていたことを知っている人間はいるかもしれないが、それはあくまで断片的な情報を得ているだ

けに過ぎない。このアパートの大家などが、男の部屋にちよくちよく女が訪れていたことを知っていたとしても、それが誰でどんな会社勤めて年はいくつでどんな境遇であるのかまでは知らないはずで、また女の方の友人達も、男の人となりを知っている人間は少なかった筈だ。なにより今日のこの日にこの部屋へあの女がやって来て、さらには男に殺されてしまったなど、そこに事実さえバレなければ何とでもごまかしようがきくのだから。

さらに何年も経ってしまえば、あの女が存在そのものが、世間から忘れ去られて行くに違いないのだ。そうだ、ついでにバレそうになったら海外にでも逃げてしまえばいい。東南アジアあたりなら、わずかな金で左うちわで暮らしていけると聞いたことがある。それでほとぼりが冷めてから、ゆっくり戻ってくればいい。何より犯罪には時効というものもある。時間がすべてを解決する。そうだ、きつとうまくいく。それならば大丈夫だ。きつと。きつと。

それは多くの犯罪者や小悪党たちが同じように考え、そして結局自滅していった行動をなぞらえているだけに過ぎなかったのだが、男にとってそれは、彼だけが知っている唯一無比のベストなプランと思われたのであった。

男はいつしかブツブツとつぶやきながら、今後の己の計画を反芻し始めていた。まずは解体のための道具をこつそりと買いに行くことにしよう。複数の店で一つずつ揃えていけば、顔を覚えられることもないだろう。解体は夜になって風呂場でやればいい。きれいに流せば血の跡すら残らないはずだ。別に遠くで捨てなくても、細かくばらした上であちこちに分散して捨ててしまえばわかることはない。すべてが終われば、近くの温泉ですこし静養してもいいかな……。

やがてその妄想が独善的だが薔薇色の未来像を描き始めたとき、男は覆っていた手を緩め、ふとその顔を上げた。そして、見た。

彼は見た。一匹の蠅があの子の乳房のまわりを小さく円を描きな

がら這い回っている姿を。

彼は見た。その蠅が次に女の乳首にとまり油色の翅をたたんで両脚をまさぐっている姿を。

彼は見た。その蠅が長い長い口吻を伸ばして黒い乳首を嘗め回す姿を。

男は女の遺体からは離れた場所に座っていたし、小さな小さな蠅の一挙手一投足がそれほどはっきりと彼の網膜が焼き付けられた筈はないのだが、彼はそれを見、そして感じた。次の瞬間、彼の中で、何かが弾けた。

男は低く大きな唸り声を上げると、女の体めがけて駆け出した。そして右の手をおおきく振りかぶって、平手をそのまま女の乳房の上に叩きつけた。

だが蠅はすんでのところでその大雑把な攻撃を避けて、翔び立っていった。男は相手を叩き潰すことが出来なかったばかりか、突進したそれまでの勢いを止めることができず、体ごと女に衝突し、さらに抱き合うような感じでくんずほぐれつのまま部屋の隅へ転がっていった。女の顔にかけられたタオルが外れ、苦悶にみちたその死に顔が露わになった。

気がつくやうに女の死体が男の上にかぶさるようになっていた。冷たく固くなりつつあったその身体の感触が男の全身を覆ったとき、それは彼の更なる狂気を爆発させる導火線ともなった。男は今度は甲高い悲鳴を上げると、女の死体をその足で遠くに蹴り飛ばした。そしてやおら立ち上がり、先程まで自分の女を愛撫していたあの虫を探しだし、木っ端微塵に叩き潰すべく、まわりを見渡し、その血走った眼を動かし続けた。

そして視界の隅に黒い小さな物体が動いているのを捕らえると、その場にあった物を、自分が手にした物を、片っ端から投げつけ始めた。それは携帯であり雑誌でありティッシュでありマグカップなどであった。だがそれらはどれも相手に届くことはおろか、

威圧感さえ与えることにも失敗していた。その上、反れて勢いあまった物たちは、あるものはばらけて散乱し、あるものは碎けて大きな破壊音を立て、あるものは窓ガラスを破って外へと飛び出していくのだった。

業を煮やした男は再び叫びながら翔び回る蠅に向かって突進していった。彼は今度はその場に落ちていた木製のハンガーを手にすると、聖剣のごとく頭上に掲げ、一刀両断すべく振り下ろした。だがその剣も、敵を切り刻むまでにはいたらなかった。そのまま床へと叩きつけられ、木っ端微塵に砕け散った。その後も男は相手を捕らえることが出来ないまま、重い地響きを立てながら狭い部屋を駆けずり回り、部屋中の物を引っ掛け倒しながら何か大声でわめき散らしていた。

男の目にはもはやその蠅の姿しか見えず、男の耳はその翅音しか聞こえていなかった。そのため、アパートの周辺にいつしか人垣ができるほど大勢の野次馬が集まってきていることも知らず、大家が先程から何度も戸を叩きながら外から声をかけていることも、次第に遠くからパトカーのサイレンが近づいてきていることすらも、まったく気づくことはなかった。

ずっとずっと男は、暴れまわり騒ぎまわり散らかしまわり破壊しまわっていた。しかしどんなにまわりを巻き込んだとしても、彼の望みはかなえられる事はなく、すべては手遅れとなっていた。

一雄はすでに騒ぎを背に、その部屋から、さらにアパートからも離れたところを飛んでいた。あの男がすでに今では自分の幻影をただ追い回しているなどとは、露ほども思っていないかった。

また彼は何故男が自分に向かってきたのか、その理由を理解しようとしなかった。潰され殺されそうになった、だから逃げた。ただそれだけのことだった。

彼はヒトであったときから、物事に対して深く考えることを拒否してきた。いくつかの細かい挫折を繰り返して世間から逃げ回るよ

うになり、だらだらと自室に籠ったままで過ごし、人生における重要な決断もすべて先延ばしにしてきた。それでいながら、己の自尊心だけは肥大化していつて、いつしか自分は特別な人間なのだと錯覚をするようになっていた。幸運は天からもたらされるものであり、自らの手で勝ち取るものではないと考えていた。

さて今、こうして一匹の蠅に身をやつした自らをあらためて省みるに、一雄はいつしかこの境遇が悪いものではないと思うようになっていた。確かにはじめはショックも受けたが、よくよく考えてみれば、ヒトであつたときのしがらみや面倒ごとから開放され、ただ本能のままに生きればよいだから、これほど恵まれた環境も他にはない。食べるものはあちこちに存在し（しかも腐つていようがお構いなしなのだ）、体を休める場所は何処にでもある。己の欲をひたすら満たすだけの気楽な毎日。義務も責任も向上心もまつたく無縁な世界。なんとすばらしいことであろうか。

蠅の一生がどれくらい持つのかは知らないが、それまでは好き放題させてもらうことにしよう。そう思い、すべてを割り切つた一雄は、だんだんと気分が高揚してきて、大きな円を何度も描きながらぐるぐると飛び回り続けた。

しばらくして彼は、ふと目にしたとある一軒家から、また甘い香りが漂っていることに気がついた。そろそろ夕食の準備が始められる時刻なのかもしれない。一雄は方向を変え、そのまま真っすぐにその家の開いた窓から中へ飛び込んでいった。

次の瞬間、彼の死角から巨大な新聞紙が振り下ろされた。

ばちーん！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4379p/>

---

蠅になる

2010年12月11日20時27分発行